

P-054

新型コロナウイルス感染症流行時における感染予防講習会参加が保育現場の実践に及ぼす影響－子どもの健康チェックおよび感染症対策の実施状況について－

鵜野安希子¹⁾、中島そのみ²⁾

¹⁾常葉大学 健康科学部 看護学科、

²⁾札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学科

背景保育施設は、子どもが感染症にかかりやすい環境であり、感染予防が非常に重要である。特に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により、保育施設での感染対策が強化されたが、感染講習会の制限や中止により、保育者が実践的な知識やスキルを学ぶ機会が減少した。感染予防講習会への参加の有無が保育現場に与える影響は十分に明らかにされていない。目的感染予防講習会への参加の有無が、保育現場における子どもの健康チェックの実施状況や感染症発症時の対応に及ぼす影響を明らかにする。方法2022年12月、全国の保育施設から無作為に5,000施設を抽出し、郵送調査を実施した。各施設の保育者3名に調査票を配布し、保育者の基本的属性、過去1年間の感染予防講習会参加の有無、子どもの健康チェックの方法、感染症発症時の対応(オムツ交換や汚物処理時の感染症対策)、感染症疑い児発生時の対応について調査した。得られたデータは記述統計およびロジスティック回帰分析で解析した。本研究は、調査時の所属先の倫理審査の承認を得て実施した。結果2023年4月までに、計1,623人の保育者から回答を得た。そのうち、解析可能な1,412人を調査対象とした。過去1年間に感染症予防講習会に参加したのは861人(61.0%)であった。講習会参加者は、非参加者に比べ、家庭で子どもの健康チェックを特定の用紙に記入している(OR=1.60, 95%CI: 1.24-2.07)、保育中に子どもの健康チェックを特定の用紙に記入している(OR=1.86, 95%CI: 1.47-2.35)割合が高かった。また、感染症発症時のオムツ交換における感染症対策を実施している(OR=1.97, 95%CI: 1.53-2.53)、汚物処理時の使い捨てエプロン、手袋、マスク着用している(OR=2.03, 95%CI: 1.44-2.85)割合も高かった。さらに、感染症疑い児が発生した際に看護師が対応すると回答した割合も高かった(OR=1.70, 95%CI: 1.32-2.19)。結論新型コロナウイルス感染症流行時において、感染予防講習会への参加は、保育者が子どもの健康チェックや感染症発症時の対応をより積極的に実施することに寄与していた。感染予防講習会は、保育者に実践的な知識やスキルを提供し、感染予防対策を強化する重要な役割を果たしていることが示唆された。感染症流行時における保育現場の安全確保には、講習会の普及と継続的な教育が不可欠である。

P-055

2024年の石川県下におけるマイコプラズマ変異菌の状況

蓮井 正樹^{1,6)}、斎藤 剛克^{2,6)}、
谷口 千尋^{3,6)}、藤澤 裕子^{4,6)}、
渡部 礼二^{5,6)}

¹⁾蓮井小児科医院、²⁾南ヶ丘病院小児科、

³⁾珠洲市総合病院小児科、

⁴⁾ふじさわ眼科小児科クリニック、⁵⁾わたなべ小児科医院、

⁶⁾石川県小児科医会

【目的】肺炎マイコプラズマ(マイコ)感染症の小児治療には通常マクロライド(ML)系抗菌薬を使用するが、2012年頃からML耐性菌が80%以上を占め、この原因は遺伝子の点変異であることが判明した。その後、抗菌薬の適正使用、小児に使用可能なニューキノロンの認可で変異率は低下し、コロナの感染対策でマイコの感染数も減少した。しかし、2024年5月にコロナが5類感染症に分類され、マスク着用や手洗いの励行も緩和されたためか、再びマイコの感染数は増加傾向になってきた。そこで、石川県下の変異状況を検討した。【方法】石川県小児科医会が管理する感染症情報登録のデータから2024年7月から12月にマイコと報告され、遺伝子変異も検査した中学生以下の小児を対象として、変異率等を比較した。なお、変異を検査した医療機関は5ヶ所であり、その所在地と発症数から、対象者の住所は奥能登(珠洲市と能登町)、金沢(金沢市)、野々市(野々市市)、白山(白山市と川北町)、南加賀(小松市と加賀市)の5地域に統合して検討した。【結果と考察】年齢と性別は変異の有無で有意差なく、以前の報告と同様であった。発症から診断までの日数は変異群で長く、分散も大きかった。これは症状が改善せず、その後に他院で変異菌と診断された症例があるためと考えられた。地域別の変異率で、野々市(61/100=61%)は奥能登(2/14=14%)、金沢(42/106=40%)、南加賀(13/46=28%)よりも高かった。次いで野々市に隣接する白山(32/58=55%)も奥能登、南加賀より高かった。これまでの報告では変異率に地域的な偏りがあるとされ、本調査でも野々市、白山に高かった。変異率の月別推移では金沢と南加賀に増加傾向はみられたが、奥能登、野々市、白山ではみられなかった。野々市、白山の変異率はすでに高く、この地域を起点として隣接する金沢、南加賀へ耐性菌が経時に広がっていった印象があった。この結果から時間の経過とともに地域的偏りは次第に小さくなっていくと予想された。なお、奥能登で変異率に変化がないのは野々市、白山から距離的にかなり離れており、影響をまだ受けていないからと思われた。今回、能登からの報告は奥能登の1医療機関だけであったが、中能登(七尾市)、口能登(羽咋市)からも報告があれば、能登地域のより詳細な動向が解析できると思われた。